

そのものではないか、と私は思う。

そして何にもまして、いま私が感じているのは、外国人である私たちにとって、こうした動きは非常に分りにくい、ということだ。今までせっかくカナダ人と接する機会があっても、ほとんどアメリカ人と同一視していた姿勢、単に表面的な大自然への憧れだけといった態度、こういったものを取り除かなくては、カナダはその本来の姿を私たちに見せてはくれない。

日本人として、カナダのみならず、外国を捉えようとすることは、その国の人間、大自然、文化を含めて知ろうとし、自分と、自分を育んでくれた国とを比較して、そこに何か新しいものを見つけ出すことだと思ふ。口で言うほど、それがやさしくないのは、よく分っているつもりだ。知識の乏しさ(例えば今年が日加修交五十周年ということさえ、今回はじめて知ったほど)や、限られた体験、そして何より私の理解不足が大きな妨げになる。同時に、感性とも関わってくると思う。私は、多分間接的な形ながら、カナダに対してその「何か」を見出そうとし、それが新しい国を造って行こうとする脈々とした流れだと感じ取った積りである。日本から見れば、羨ましい点も多いが、カナダ人から羨ましがられることも多いだろう。例えば、殊に歴史の点などそうであろう。

自らの持てるものを大切にし、矛盾なき一つの方向へ向けて歩んでいる国、そしてその国を動かし、何より大切な「自

然」という財産を忘れない人々——そういうカナダが、私の憧れの国であることには、変わりがない。

私はまだ見たことのないカナダを、一生懸命知ろうとしている。もし間違っていることがあったら、教えていただきたい。

私はこの七月、外務省見学に、高校生として参加し、園田外務大臣や、志賀外務次官とお話する機会があった。そして国交が、一国を左右するどんなに大切な問題であるかを、改めて認識した。

〈入賞〉

一教師のカナダ体験

小学生の相互訪問を通して

権田梅芳 ごんどうめよし

「校長先生、私は今、涙の海に泳いでるの」——と、大柄なベツツイが私にとりすがり、涙にまみれた頬をよせる。ドナやシェリーたちも、次々にさがる。デビットやケンたちは、歯をくいしばって、私の手を強く握る。

ゲートの手前にも、母親にかき抱かれ、声を上げて泣いて別れを惜しむ子がいる。昭和四十九年十月三十日夜の羽田空港のロビー、二週間を日本の家庭で過ごしたカナダの小学生たちが、今、立ち去ろうとしている。

翌五十年六月十一日朝のウイニペッグ国際空港でも、全く同じ光景が展開されていた。アン校長と私は、肩を抱き合い、

将来、兄や私がつくるであろうカナダの沢山の友だちと、心からのおつきあいをしたい。今度は絶対にアメリカ人と混同するような失礼なことはいしませない。

私はこの夏、カナダに行きたかった。だが、単なる見物だけに終わらせたくなかった。思いとどまった。一人でも多くのカナダの人たちと友だちになるためには、まず話すことが大切だと思った私は、懸命に英会話を学んだ。来春、大学進学が決まったら、厳しい冬のカナダを訪ねようと計画をたてている。

残る手を強く握り合った。お互い責任者として事を成し終えた感慨が胸に迫り、二人とも、感謝をこめた「ありがとう」の外、言葉は出なかった。

子どもたちもまた、サヨナラ集会の日記に、「このままここに残りたい。リナータもジョンもデビットも、みんな泣いていた。私たちは、日本に帰る気がなくなってしまった」と書いていた。

アン校長の手紙に、「全員安着のお電話で、ほんとにホッとしました」とある。前年秋に同じ思いを味わった私には、痛いほどよく判る。彼女はまた、海を越えてお互いの手をさしのべ、友情の誓いを

結び得たことを喜び、「愛する子どもたちにしてやれたことは、二人が地上を去った後まで消え去ることはないでしょう」と言ってきた。

私は一介の小学教師に過ぎない。しかしこの四十年間、子どもたちにしてやることは何でもしてやろう、と考え、実践してきた。子どもたちの海外交流も、愛し子らと祖国の輝く将来をこいねがって企てた試みの一つである。

戦時中、私は教壇から応召し、四年間大陸・南方に転戦した。一時フィリピンで学校に関係してラテン系の校長さん一家と親交し、また蘇州では中国人に知己を得た。酷寒の北満から熱帯の島々まで多種多様な土地柄があり、そのどこにも人が住みついて営々と働く姿は、壮烈とさえ感じた。彼らの人生観・世界観には私の理解に苦しむ面もあり、またその人生哲学は風土・歴史等と深く関わっていた。さらに、私たちはいつの日か、彼らと世界という土俵で角力をとらねばならず、もつと外国と外国人を知らねばならぬ、と思った。

四十六年秋、幸運にも文部省から欧米視察に派遣された際、私は、ただ教育事情だけでなく、政治や経済、文化と人間を知らうと精力的に努めた。在留邦人や日系人には、外から見る日本、外人の日本人観等について率直な意見を求め、見学・懇談会・ホームステイなどでは、つとめて多くの人たちと話し合った。特に、教え子の在外第一線商社マンや公務